
白い貝の声

北本彩和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い貝の声

【Nコード】

N8741B

【作者名】

北本彩和

【あらすじ】

母親の再婚で大輝には新しく弟ができた。如才なく振る舞う弟の明にはどうも隠しごとがあるらしくて…。「壊れた海のひとつまみ」の続きにあたりますがこちらだけでも読んでいただけます。

新しい家族

「僕を産んだ母のこと、まったく覚えてないんで。新しく義理の母が来たとかいうことじゃなくて、やっと自分にもお母さんができたんだ！　っていうか…そういう感じです」

言ってから照れたように俯いたそいつを見詰めて、母の顔は綻んだ。

二週間ぐらい前、母親が「再婚しようと思うの」と言った。休みの日に、妙にめかし込んで出かけるのを見ていたから、こんな日が来るかもしれないと覚悟はしていた。

父親はおれが中一の時に交通事故で死んだ。携帯電話で通話しながら運転していたバカが突っ込んできて重体。翌日に死亡。五年経った今でも、病院のベッドに横たわる父親を見た時の衝撃は忘れられない。

だけど、それとこれとは別問題。父はもういないんだから、新しい旦那を母親がつくったって別にいい。ただ、母親を幸せに出来る奴じゃないとだめだ。おれが納得できる奴。

そうして双方勢揃いで会食をという運びになった。

妹はおもいきり反対していた。よそのオヤジが突然家族になるのは気持ち悪いと言い張った。先方にも子供が、しかも一六才の男がいると聞いて益々嫌がった。

それをどういう方法で説き伏せて会食に連れてきたのかは知らない。妹は気合いの入った服装で、何やらはしゃいでいた。

その謎は、相手を見たとなん解けた。先方は脂ぎってない普通のおじさん。敢えて言えば落ち着いた感じがする。母の好きそうな、生命力とか生活力の薄そうな人だった。たぶん『私がいなきゃこの人はダメだ』と母は思い込んでしまったのだろう。

問題はその子供。凄い女顔だった。息子だと聞いていなければ絶

対に女と間違った。

茶色っぽい髪はたぶん染めたんじゃない。一目でそれが分かる白い肌。茶色い目は少しつり上がり気味だけど、そんなことより大きさが目立った。あごが細く、そのせいなのか顔が小さく見える。ごつごつした印象がどこにもない。ひげが生えるのかも怪しいような顔。父親とは全然似てない。無理に似ているところを探すなら、何食って生きてるのか分からない感じが似ていると言えるかもしれない。

妹は自他共に認める面食いだ。この顔が気に入らないはずがない。遊んでそうなタイプより、こういうおとなしげなタイプが好きだ。てことも知っている。ジャニーズだって大好きだ。母はたぶん写真か何かを妹にだけ見せていたに違いない。

おれが反対しない限り、この話はたぶんまとまる。それがどうしても嫌と言うほど、相手方はおかしな奴らじゃなさそうだ。後は母の見る目を信じよう。コースがデザートに行き着く頃には気持ちも決まった。

そんな時母が「明君の新しい母親に、私になってもいいかしら？」と笑顔で、その実かなり緊張して言った。テーブルの空気が張りつめた。奴は少し照れたように返事をした。

空気は和んだし、母は安心したような顔をしている。だから、何が悪かったと言うんじゃない。だけど、矢島明は侮れないという気がした。どこことなくその如才なさがあやしかった。

根拠もなく嫌だと言い張る気はない。

そついうわけである夏の日にウチの母親は再婚し、おれと妹の苗字が変わった。五人で住むには手狭だからと、夏休みも半ばを過ぎた日に一軒家に引っ越した。中古物件とはいえ庭付き一戸建て。ロースは何年で組んでるのか知らない。払えない場合、やっぱりおれが将来的には払うのか？ 長男だから。

団樂

「大輝さん、どうかしたんですか？」

家族の団らんを演出中。この家のローン返済について考えていたんですとも言えない。その前に何故年下に丁寧語で返事を考えているんだ！ 自分。しっかりしろ、おれ。

「お兄ちゃん返事ぐらいしなよ！ 何？ 頭まで悪くなったの？ かわいそうに」

妹が溜息を吐きながら首を横に振る。

「頭までつてどつという意味だよ。おれのどこが悪いって？」

「顔！」

ハッキリ言わないでくれ。今まで自分の顔についてそんなに考えてみたことがない。それなりに気にしてみたりもしたけど、別にもの凄い不細工というわけでもないし。いや、自分なりにイケてると思ってた。

弟ができて、その顔に見慣れるに連れ、自己認識を改めさせられていっている気がする。最近自信が、ない。だからハッキリ言われるとツライ。妹は新しくできた兄にベツタリ。

そんなに懐かないでくれ。つい最近まで他人だったようなそんな男に。

「ちゃんとカッコイイと思うよ、智美ちゃん」

フォローを入れられても、全然嬉しくない。むしろムカつく。取り澄ました顔。自慢げな顔をした方がまだかわいげがある。

妹は明の言葉に首をひねる。

「明兄ちゃんの方がカッコイイ！」

明は苦笑している。面と向かって顔をほめられて、何と返したらいいか思いつかなかったのかもしれない。

言われ慣れていたら許せない。もしこれが照れている演技だったらどうしてくれよう。ありえないとは言えない。

「三人はすっかり仲良くなったのね」

お盆に急須と湯飲みをのせて母親が現れた。湯飲みを五個、テーブルに手際よく並べる。五個セットの湯飲み。柄は全部違って、どれが誰だか決まっている。この家に引っ越して最初に決めたことが、どれが誰の湯飲みか決めること。それでいいのか、母よ。

「要さん、お茶淹れたわよ」

テーブルから離れて新聞を読んでいたお父さんが席に着いた。

夏休みの日曜日。昼下がりに家族でお茶を飲む。何とも言えずこちない。あと一分ぐらいでスフレが焼き上がる。早く出来上がって欲しい。おれにはしゃべることがない。クーラーの利いたダイニングに四人、無言でお茶を啜る。

ピー！

おれの願いはやつと届いた。

オーブンから漂ってくる甘い匂いが強くなり、待望のスフレが現れる。手のひらより小さいくらいの、深さのある小型耐熱皿のようなものから、茶色いフカフカしたものが盛り上がっている。

「熱くなってるからコcottに触っちゃだめよ」

いかにも母親らしい調子で注意しながら、オレンジのソースと木いちこのソースを持って、やっと母親が席に着いた。好きな方をかけていいらしい。

今までスフレを作ったときにオレンジのソースを作ってくれたこととはなかった気がする。木いちご好きだから別にいいけど。なんで作る気になったんだらう。

しかしそんなことを一々考えている場合ではない。スフレを食べるときの鉄則、如何に早く食べるかと言うこと。早く食べないとしぼむ。このフカフカが凹んで行くのを見るのは、少し寂しい感じになる。その凹みを見ないために、スフレの時は出来上がりをテーブルで待つことになっているのだ。

木いちごジャムにお湯を少し入れて、レンジで温めてラム酒を加えて作ったソースをスフレにかける。この時、いくら木いちごの味

が好きでもかけすぎてはいけない。卵とバターの匂いが全部かき消されてしまう。

程良くソースをかけたら、スフレにスプーンを突き刺す。泡を潰すような、スポンジよりも軽い感触が楽しい。口に入れると、噛んでるそばから消えていってしまうような感じ。やさしい匂いと柔らかい感触を残して溶けていくような。

おいしいけれど、すぐに食べ終わってしまう。それでも単純といわれようが何と言われようが、今おれはシアワセ。

つい熱中して食べてしまった。

ふと明の様子を窺うと、オレンジのソースをかけていた。しかも食べ方がチマチマしている。そんな食べ方ではスフレが凹んでしまう。そんな、ソースの中身聞くのなんか後でいいから、早く食べろ。

「お母さんはよくこんな風にお菓子を作ったりするんですか？」

愛想良くスフレをほめながら、明が聞いている。そんな風にチマチマ食って本当においしいのか？

「明兄ちゃんも甘いもの好きなの？ 男の人ってあんまり好きじゃない人多いって聞くけど」

「杏仁豆腐と寒天以外はだいたい好きだよ。小学生の頃かな、大人になつたら堂々と甘いもの食べられなくなるんじゃないかと思って、真剣に心配したことがあるくらいには好き。杞憂だったけどね」

「一番好きなのって何？ お母さんに習って、いつか作ってあげる！」

おれは智美にそんなこと言ってもらったことない。

「一番って言われるとちよっと困る。チョコレート系とリンゴを使ったお菓子は特に好きかな」

無意識なのか少し首を傾げるような仕草をする。男らしさとは無縁の動きだが妙に似合った。

心の隅で、明がちゃんと男なのか疑問を持っている自分を感じる。弟だとわかってはいるけれど。何か納得いかない。

「かなって何だよ。自分の好み聞かれてるのに疑問形で答えるなよ」

一度怒らせてみよう。愛想のいい顔を剥いで、素の部分を見たい。「こういう話し方が癖なんです。気になりました?」

「なる。それにお前の言い方だとスフレは好きじゃないのか?」

「おいしいですよ? それが何か」

「チマチマ食ってるなよ。せつかくふくらんでたのが凹むだろ」

笑顔を崩そうとしない明にいちやもんをつけ続けるのは、ガキそのもののような気がしてくる。智美が咎めるような目でおれを見ている。おれだっておれが悪いことはわかっている。単なる言いがかりだって意識してる。しかも内容のレベルが低すぎる。バカ丸出し。これじゃあ明も怒れないかもしれない。

小さく溜息を吐くと、明は残っていた一口を食べてごちそうさまを言った。

「お母さん、今日、友達と約束があるんです。夕飯は要りません」

「そうなの? 遅くなるのね。いつてらっしゃい」

はい、と短く返事をする、鞆を持ってさっさと家を出ていつてしまった。友達と遊ぶにとしては、少し大きい鞆だと思った。

ボタンとドアが閉まって、カチャカチャ鍵を閉める音がしたのを聞いてから、妹が口を開いた。母親は台所でカップとお皿を洗っていてテーブルにはいない。お父さんは自分の机に行ってしまったのだろ。静かな場所で読書するのが趣味らしい。

「何でお兄ちゃんはそのなの?」

「そうって何だよ」

言いたいことはなんとなくわかるものの、不機嫌な声で答えた。

自分の言動がバカだったと意識しているからだ。

メール

「明さんも私も頑張って家族しようとしてるの。参加しないのは自由だけど、何で邪魔するの？」

特に明さんはお母さんに凄く気を遣ってるのに、と苛々した調子で言った。

「家族って、そんな頑張ってるものか？」

「だってもともと家族じゃないもの、意識してやろうと思わなきゃ家族っぽくなんてなれない。でも同じ家に住むんだよ？ どうか努力して折り合いをつけていかなきゃ」

現実的だよなあ、と感心するしかなかった。

妹はおれの中では小学生の時のままだったのに。逆上がりが出来なくて、クラスの子に負けたくないと言って、半泣きになりながら練習していた。もう少し高学年になると、足かけ周りを出来るようになりたくて、太股に痣を作って頑張っていた。

大きくなったなあ、と思う反面、基本的には変わっていないことにも気付く。

努力でどうにかなることは、どうにかしないと気が済まない。中二になった妹は、たくましく成長していた。おれは成長できているだろうか。

「ともかく、私が次に明さんに会うまでに、ちゃんと謝つていてよ」

「お前と明が会う前につて何だよ」

「わかんないの？ うちに帰ってくる前にどうにかして謝れって言ってるの」

つい大きな声を出してしまい、妹は窺うように洗い物をしている母親の方を見た。聞かれて困るようなことではないが、あまり聞かれたくはないらしい。

「どうやって？」

「そのくらい自分で考えなさいよ。だからお兄ちゃんは大力だって

言うのよ。お兄ちゃんのせいでウチが気まずいのは、私嫌だから」

言いたいことを言って少し落ち着いたのか、頷いてもいないのに了解したと見なしたのか、妹は黙った。

「お母さんは？」

唐突に背後から声をかけられて驚いて振り向くとお父さんがいた。生命力のなさそうな人だと思っではいたが、存在感まで希薄だったとは。すぐ後ろに立たれているのに気がつかなかった。足音くらい立てて歩け、怖いから。そういえば明も足音を立てないで歩く。

「台所で洗い物してるよ、お父さん」

おれが驚いているうちに智美が答えた。息子しかいなかったせいで娘というものに憧れを抱いていたお父さんは、智美にお父さんと呼ばれると嬉しそうに照れたように笑う。ただ元来無口な人らしく、ぼそぼそとありがとうとだけ言っただけ言っただけ台所に行った。

お父さんが声をかけたからか、水音が止まる。智美は黙って聞き耳を立てている。当たり前のように立ち聞きするのもどうかと思う。確にお父さんが自分から話すのは珍しいから、何を言うのかは気になる。

「明は今日、帰ってこないそうだ」

「えっ、帰ってこないって、どうするの？」

「泊まってくる。向こうで引き留められたらしい」

「要さん明君のお友達の名前とかわかる？ お家に電話してご挨拶しなきゃいけないわ」

母は『どうしましょ』をくり返しながらあたふたし始める。お父さんはその横でぼーっと立っている。いろいろ考えているのかもものしれないけれどぼーっと、としか思えない。

明が携帯電話を持っているんだから、相手の家の電話番号なんて必要ない。お父さんへの明からの連絡だってたぶん携帯だろう。

母親がだいぶ慌てているのがよくわかった。

「挨拶はいらないよ、向こうも気を遣うだろうし」

「そっというわけにはいかないの。明君はどこに行ったの？」

言い辛いらしく暫く間がある。

「…明のお祖父さんのところ」

「…要さんのお父さんは…」

「十年以上前に他界してる。明は…香月さんの実家の方に行った」

「そう、じゃあ電話しない方がいいかしらね」

「…明は…、君にお祖父さんのことを言いたくなかったようなんだが。それで今、メールが来て…、無断外泊はまずいだろうし…」

お父さんはもじょもじょ言い訳をしている。別にお父さんが言い訳しないといけないことじゃないと思う。堂々と伝えればいい。

悪いのは明だ。

あいつはどういう神経してるんだ？ 一番最初に明は自分の母親のことを覚えていないと言った。それは嘘なのか？ 母親の実家によく行くなら、そこで母親に会っていないはずがない。

新しい家族をするつもりなら、新しい母親が自分の行動をどう思うかくらい考えていいはずだ。違う、あいつなら考えてる。考えてそれでやってる。

どうでもいいことと言いがかりをつけたおれへの、仕返しかもしれない。母親にそんな婉曲な仕返しをするぐらいなら、はっきりおれに言いたいことを言えばいい。それを聞きたくておれもやっているんだから。それも知ってて相手にしないんなら、あいつはそうとう性格が悪い。

「お兄ちゃん、明さんが帰ってくる前に、話つけといてよ」

複雑な顔で、妹が強い口調で言い捨てた。おれは決意を込めて頷いた。

「明のお祖父さんの家は、どこにあるんですか？」

お父さんは気まずげな顔をしたが、もごもごと六つ先の駅名を告げた。それを聞いてすぐに家を出たおれは、電車に乗ってから明にメールを打った。

『言いたいことがある。そっちの駅に向かってるから分かるところ

『に
いる』
『駅
に
いる
よ』

駅

改札を抜けると、時計の下の壁に寄りかかっている明がすぐに見つかった。腕に白いレジ袋をぶら下げて、ペットボトルのポカリを飲んでいた。駅の中にコンビニがあるのだろう。こちらに気付いた明はまるで楽しい待ち合わせをしていたみたいに手を振った。

「意外とマメなんだね、メールで用件済ませばよかったのに」

何が楽しいのかわからないが、楽しそうに明は言った。その表情でそれが皮肉なのだと気付いた。

「直接言わないと気が済まないと思ったんだ」

「何を？ 僕が祖父の家に行くことへの苦情？ 言われる筋合いはないね」

余裕の顔でペットボトルを手の中で弄ぶ。

「おまえが嘘ついたのは何でだ？」

「嘘なんかついてない。わかるように話すことも大輝さんにはできないの？」

またバカにされた。

「母親のこと覚えてないって最初に言ったくせに、母親の実家に当たり前みたいに行くってどういうことだよ。覚えてないなんて嘘、何のためについた？ 会ってんだろ？」

軽く溜息を吐いて明は笑顔を作るのを止めた。失望したようにおれを見て、そのことかと言った。

「父は母と離婚したけど、離婚した母は実家に戻ってない。実家には祖父が一人で住んでる。小さいときからずっと、夏休みは一回行くことになってるんだ。それで今年急に行かなかったら、僕が継母に行かせてもらえないでいるみたいだと思わない？」

同意を求められて、黙るしかなかった。

継母、ママハハという言葉はいじめという言葉とすぐに結びつく。「それに自分の母親に会えたとしても、会いたいとは思わない。ア

ンタと違つて僕は母親に思い入れなんてないから。父親にだってないけどさ」

笑つてはいなかったが怒つてもいない、しらっと冷めた顔で言つた。

「お望み通り僕は怒つたけど、これで大輝さんの気は済んだ？」

思つてることを全部読まれていたらしい。顔にでるタイプだとよく言われるが、見透かすような物言いはむかつく。おれには明が何を考えているのかさっぱりわからないのに。

おれが怒りにまかせて何か言おうとした瞬間、明の携帯が鳴つた。脳天気なほど明るい電子音のメロディー。氣勢をそがれておれは黙り、明はさつさと電話にでた。

「……すぐそちに帰るから。……わかつてる海岸の方の道、通らなきゃいいんでしょ？ うん、……じゃあね」

電話で話す声を聞いて、急に明が自分より二つも年下なのを思い出した。会う前に母親が十六才だと言つていたが、実際に会つてみると年下という感じがしなかった。見た目は年齢通りのはずなのに、自分より大人みたいに感じていた。

ウチの中で気を張つていたことがわかった。たぶん明はそのことに気付かれなくなつただろうが。

年相応の無防備な声を出させる相手が誰か知りたくなつた。

「もう行くよ。用事は済んだでしょ？」

「……今の電話、誰だ？」

眉間にきゅつと力が入つたのが見えた。プライベートに立ち入っている自覚はあつた。

「お祖父ちゃんだよ。……じゃあね大輝さん、家族の皆さんによろしく」

他人の家族に言つてするような言葉を残して、明は行つてしまつた。追いかける気にもなれない。行きがけに言葉と一緒にぶら下げていた袋を押しつけられた。文句を言うためだけに電車に乗つてこまできたおれへのご褒美だそうだ。

押しつけられた袋の中にはホットの缶コーヒーが入っていた。この暑いのにホット。捨てるのもつたいないし、不本意だが全部飲んだ。ますます暑い。

電車に揺られながら、流れていく景色を見る。さっきまでの熱が、冷房で一気に冷めた。

自分は怒っていたはずで、明に文句を言いに行ったはずなのに、なんでこんな気分になったのかわからない。謝らせたわけでもないのに、もう怒ってない。ただ漠然と疲れた。

明は祖父の家に帰って行った。たぶんそういうことなんだ。同じ家に住んでいても、明は自分たちを家族と思っていない。

そのことに失望を感じていることが、自分でも意外だった。自分の方こそ彼を他人だと思っていたつもりだったから。

妹は努力して家族になろうとしている。それにつき合っているから、あいつも努力しているはずだ。けどその努力は、家族になるための努力じゃなかったのだろう。ご近所づきあいみたいなものだろうか。自分が快適に生活するために円滑な人間関係を望む。それは間違っていないとおれも思う。

思うけど納得できない。

血が繋がっていないと、家族にはなれないのか？ それならあいつにとつて、父親は特別な存在のはずだ。一番側にいて、一番血の繋がりが濃い。それなのに特別には見えない。携帯で話していたような声を、家で聞いたことがない。そもそも父親と二人で会話しているところをほとんど見ていない。

変わった親子だと思う。お互いに感心を向けていない。たった二人の親子なのに。明が母親を覚えていないと言ったのが本当なら、母親は明がかなり小さい頃に出ていったはずだ。それならあいつを育てたのは父親以外いない。それならもっと違う関係が、もう少し信頼とかそういうものがあっていいものじゃないのか？ そういう考えは全部自分の理想なのかもしれない。

わかってる。

現実はいきれいなだけじゃない。どうしようもない、収集のつかないものが多い。おれだって自分の母親に何の不満もないのかと聞かれて、ないと答えれば嘘になる。母の選んだ新しい父親を、納得できない気持ちで見ていることがないとは言えない。無害かもしれないがハッキリしないパツとしない男だと思う。

電車が止まる。

思わぬ所に思考がいつてしまい、はっとして我に返る。今、自分は考えてはいけないことを考えていた。ハッキリ考えることを我知らず避けてきた領域。たぶん時間が解決してくれる。それでいいじゃないか？ 忘れよう。自分は何も考えてはいなかった。その方がいい。

家に帰ると妹が待ちかまえていた。仁王立ちの彼女に言う言葉が見つからなかった。

「で？ ちゃんと明さんと話してきたの？」

話はした。ただ明本人を目の前にすると自分のペースで話が進められなかった。自分は当初の目的通りの成果は得られなかった。それを妹に正直に告白するのは情けない。

「あいつは別に、母親に会うつもりで向こうの家に行ったわけじゃないかったって」

「そう。でもさあ、こんなこと言うのもなんだけど…、それがホントかどうかってわからないよね？」

胸の中で急に何かがこわばるのを感じて溜息を吐いた。息を吐くくらいじゃ硬くなったものは戻りそうにもなかった。

「そうだな。嘘ついてるようには、おれには見えなかったけどな」
不機嫌に言うと、妹は機嫌を取るようにお兄ちゃんを疑ってるんじゃないよ？ と言った。上目使いの目線が気に入らなかった。自分で確認しないと信じられないのなら、おれに行かせるなんてしなければいい。

苛々するのを隠すように、自分の部屋に行った。

溜息をつく。自分が短気だという自覚はある。だけど、こんな風

にずっとムカつくことはあまり無い。最近妙にストレスが溜まっている気がする。部活を夏休み前に引退して、はけ口が無くなったからということもある。でも一番の原因は家族とどう接したらいいかわからないことだ。

明やお父さんはもちろん、母親や妹も。あいつらみんな、何考えてる？

おれは明とお父さんのことしか覚悟していなかった。生まれたときからのつきあいの母親や妹が変わるとは思っていなかった。母親がどうしてあの男を選んだかわからない。妹が何を基準に明との距離を測っているのかわからない。おれだけが、新しい家族を作っていく二人についていけない。

窓の外では日が完全に落ちて、夜が徐々に濃くなっていく。カーテンを揺らして吹き込んだ風は、昼間が嘘みたいに涼しく感じる。どこか遠くで風鈴が、冷たい音で鳴った。

呼び名

どんな時でも夜は明け日が昇る。それは今日も例外ではない。太陽は何もかもに平等に光を投げかけ、今日も全てを蒸し焼きにする予定らしい。澄まし顔の朝の太陽がどんなに恨めしくともどうすることもできない。

そう、どうしようもないことってというのは、いつだって何かしらそこにある。昨日やはり明は最初の連絡通り帰ってこなかった。帰ってこないだろうとは思っていたが、本当に帰ってこなかった。予想の範囲内だし諦めてもいたから、それ自体はもういい。問題はそこじゃない。

夕飯がもの凄く気まずかった。しかも気まずい原因はどうもおれらしかった。

理不尽だ。悪いのはおれじゃない。もともとは明のはずだ。なのに。

ほとんど誰も話さない夕飯。四人でテーブルを囲んでいるのに、孤独な食事。一人よりも孤独。無言の圧力を感じる。こういう時テレビは便利だ。無音の空間が静けさに支配されるのを阻止してくれる。それがどんなに無意味なものだったとしても、楽しそうな会話と笑い声を届けてくれる。深い沈黙の底から引き上げてくれる。気まずい雰囲気に関心な振りをさせてくれる。

テレビを作った人はたぶん、そんなことに使われるとは思ってもしなかっただろう。もっと高尚な目的を掲げて作り出したはずだ。でも現実はこの雰囲気はこんなもの。

母親はおれが妹や明と何かいらない問題を起こしたと思い込んで心配で頭がいっぱい。その心配はあながち外れてはいないけど、話してもいらないうちからそんなに悩むほどじゃない。妹はおれの機嫌がよろしくないと判断して、触らぬ神にたたりなしを決め込んだ。お父さんはこの雰囲気をわかっているのかいないのか、それさえわ

からないいつもの無口。おかずの肉じゃがをおいしいと褒めていたから、あの人なりに雰囲気を良くしようと努めていたのかもしれない。残念ながら不発に終わった。かき込むように急いで夕飯を食べ、おれはテーブルを離れた。

消化不良を起こしそうだった。怒るなら怒ればいいし、気になることがあるなら問いただせばいい。何でそれができない？

高三の夏。ぐちゃぐちゃ考えていないで、暗記し勉強する機械になったほうが自分のため。そのはずだと考えてみても、昨日の夜はどうも勉強できるような気分じゃなかった。机に座っても何も手につかなかった。

それで今日は久々に早起きした。今日こそは受験生らしく勉強しようという決意のためだ。勉強は朝がはかどるという人もいるし、おれもはかどるかもしれない。微かな希望のための早起き。

実際にそれではかどったかという問題は、精神衛生のために伏せておく。参考書のページ数だけじゃ測れない領域があるに違いない。そう信じたい。理解とか思考とかいうものには深さってもものがあるはずだ。

妹は部活、明は母方の実家、お父さんは仕事。家の中にはおれと母親だけ。おれがこうしてわけのわからない参考書や問題集とにらみ合っている時に、妹はラケットを持って走り回っていると思うとおもしろくない。どんなに暑くてもいいから、家から出たい。思いつきり運動して、体育館は風通しが悪いと文句を言っていた去年に戻りたい。

今頃智美はラケットを振り回しながら、日に焼けると文句を言っていることだろう。過ぎてみないとわからないことはある。妹も来年は受験だ。

「大輝！　ゴハンよ〜」

ノートはまだまだ白いのに、午前中は終わってしまった。午後はもう少しどうにかしたい。

一階のダイニングに降りていくと、テーブルのまんなかにガラス

ボールいっぱいのもつめんが置かれていた。いくつも氷が浮いている。夏だ！ という気がした。とりあえず麦茶をついで夏満喫態勢を整えた。

そうめん汁の入った片手鍋を母が持ってきたてそうめんのボールの横に置いた。汁が足りなくなったら好きにつき足せと言うことだろう。一応冷ましてあったがナマぬるかった。ここ数年そうめん汁は売ってるびん入りが多かったから、少し意外だった。

母親の相手は、おばさんに向かって「お嬢さん！」と言う、もったいぶってしゃべるテレビに任せて黙々と食べた。外に行って夏を感じられない分、今こそ夏。食べるだけで夏できる。そうめんは偉大だ。

母特製そうめん汁に生姜とネギとワサビとシソを適当にいれる。これは深く考えずに多めに入れた方がおいしい。そうめん自体には味がないから、薬味は不可欠だと思う。ワサビをいれすぎると泣きそうになるけど。だけどそこでヒーヒー言うのもワサビの醍醐味なので多めに入れる。そして今日も涙目になる。ひとしきり泣きを堪能したら、汁を足す。なぜか一仕事終わったようなすっきりした気分になる。たまには涙もいいものだ。ここで用意しておいた麦茶を飲む。

てつきりお嬢さんになりきっていると思っていた母親と目があつた。そこはかとなく気恥ずかしい。どうせおれはガキです。ごまかすように麦茶をもう一口。

急にテレビが消された。

「昨日、明君に会ったの？」

何でもないような顔をして訊くから、おれも表情を変えないように努力して頷いた。

「なんか言ってた？」

「別に。あー、お祖父さんの家に行くのは毎年恒例で、前から行くの決まってたみたいなこと言ってた」

そう、と気のない相づちをうつて黙ってしまった。うるさいぐら

いに蝉の声が聞こえる。

「やっぱり明がお祖父さんの家に行ったの気になる？」

「そりゃあね」

「でもお祖父さんトコに母親がいるってわけじゃないみたいだよ」

「それは知ってる」

ウチの母親が知っているととは思わなかった。知っていたならどうしてそんな複雑そうな顔をしているのだろう。それに明の母親はどこにいるのだろう。いないという話だけで、どこにいるという話を聞いていない。実家にいないということを何で母親は知っているのだろう。

「本当は再婚、来年まで待てば良かったんだけどね……」

どういう意味だ？ 大学生になってもう少しおれが落ち着いてからということ？ 浪人の可能性もあるから待つのを止めたとか。

「そしたら大輝は学校、名前変わらないで卒業できたでしょ？」

「だけどそういうこと考えてたら、智美もいるから二年待つはめになるだろう？」

「そう。ねえところで明君と上手くやっていけそうなの？」

それが本題か。昨日おれが一方的に怒っていたのを見ているから、不安に思っただけでも仕方ない。実のところ自分でも上手くやっていけるか自信がない。

「アンタは短気なところがあるし、明君はそういう相手とつき合ったことなさそうだし」

「……どうせ短気だよ。直せって言っても、無理だからな」

ムツとしながら言うと、アンタの母親何年やってると思ってるのと言われた。今更どうしようもない短気だと言われたようで、それもおもしろくない。

「要さんが大輝君が気を悪くしてるだろうって気にしてるのよ。明は昔からああいう子だから、仕方ないと思って欲しいって」

小さい時からあの性格。どんな幼児期を過ごしたんだ？ かなり

歪んでないか？ 怒らないで嫌味を言うこまっしゃくれたガキだったんだろ。明が小さい時に会わなくて良かった。そういう変に大人びたガキは、耐えられない時がある。泣きながら駄々をこねる子どもの方が、まだかわいげがある。母親がいなくてことが影響しているかもしれない。覚えてないって言ったけど、何も思わなかったはずがない。

「智美も明君とどうつき合えばいいか、ちょっと決められてないみたいだしね」

妹は上手くやっている。違うと言われてもそうは見えない。そんなはずがない。

「呼び方が一定してないの。明兄ちゃんて呼ぶ時もあれば明さんって呼ぶ時もあるし。この違いって、結構差があると思うでしょ？」

家族の呼び方をするか、他人にも使える呼び方をするか。智美も距離感を上手く掴めていないかもしれない。そうか、おれだけじゃなかった。

「明がおれのこと大輝さんって呼ぶから、智美は明のこと兄ちゃん呼ばわりしていいか微妙なんじゃない？」

母親に上手くいつてない証拠を掴まれてはいけない。心配は出来るだけさせたくない。妹が馴染めていないのだから母親だってたぶん、見た目ほどには普通じゃない。新しい家族に溶け込んだように見えても、きっとそうではない。

おれの言葉に納得してはいないはずなのに、母はそうねと頷いた。

「お母さんは明のこと君づけ」

「会っていきなり呼び捨てはしづらかったのよ。それに一回定着すると変えるのもヘンじゃない？」

会ったその日から呼び捨てにしているおれの立場って一体。でも確かにあいつは君づけが似合うような顔をしてる。

「お父さんとは上手くいつてる？ 聞くだけ無駄か」

「こう見えても新婚ですもの」

答えのわかっている質問は、予想通りの笑顔を引き出せた。ハ―

トマークが聞こえそうだった。いい年して惚気てる母親を見て、再婚はして良かったのだと思った。

午後は午前よりも受験勉強がはかどった。精神状態が大きく影響しているらしい。自分で思っていたよりも、おれはずいぶんと繊細な神経の持ち主だったと判明した。こんなことで受験が大丈夫なのか不安。前日の夜は眠れなくて羊を数えたりするんだ。それで逆に目が冴えて逆切れしてますます眠れなくなったりするのもかも。気が小さいのか？

夜になると明が帰ってきて、ちょうどその頃帰ってきたお父さんと二人で夕飯を食べていた。相変わらず会話のない親子だと思った。明がちゃんと帰ってくるのか自体を心配していたので、たとえばもっと険悪な親子振りだったとしても気にならなかっただろう。ただ無言でいるくらいということはない。そこにいるというだけで良しとする。高望みはしちゃいけない。父親とても仲の良い高校生というのは稀なんだろう。もし違っていてもそういうことにする。遅めの反抗期に違いない。

おれの反抗期はとっくの昔に終わった。もう少し大人にならないと。とりあえず明より。目標はいちいち苛々しないこと。

覗き見

今日も快晴。シロップをかける前のかき氷みたいな入道雲がゆうゆうとそびえている。青い空とのコントラストがきれいだ。

家の中にはかりいることに飽きたので、昼から図書館まで来てみた。一番近い図書館の机は、書き物に使ってはいけないそうだ。本を読む人専用で、勉強はするなと全ての机に張り紙がしてある。図書館員もご苦労なことだ。広い図書館だから机も結構な数がある。

図書館で勉強が出来ないっておかしくないか？ 図書館のサービスは本の貸し出しだけじゃなくて、スペースも提供することも含まれるんだと思っていた。思い込みだったらしい。

勉強ができないなら図書館にいる意味がない。さつさとその場を後にする。駅前のミスドまで行くと、そこで最近の悩みの種が笑っていた。実際に笑っているかは見えなかったが、そんな雰囲気だった。

楽しそうだ。友達らしき男と二人で向かい合ってしゃべっている。ちょうど入口に背を向けるように座っている。

ミスドに入ったことを後悔した。マックにしておけばよかった。マックに入ってもホットアップルパイもパンナコッタもあったのに少し遠くなるがケンタッキーもあったのに。ホットビスケットは心からおいしいと思う。あれはメープルシロップをかけるところがいい。それにあそこのフローズンヨーグルトも結構おいしい。

全部、後の祭り。三百円という値段に惹かれたのが敗因だということとはわかっている。雨の日にミスドに来ると、コーヒーとドーナツ一つをセットで三百円で食べられるカードがもらえる時がある。あまりこのカードは知られていないようで、自分以外持つてる奴を見掛けない。しかもコーヒーは何杯でもおかわりできる。つまりこのカードがあれば三百円でいくらでも店に居座れるということ。図書館に机がなかったから、ミスドでテーブルを占拠しようという魂

胆だった。

意気揚々とゴールデンチョコレートとコーヒーを載せたトレイを持って、禁煙席に向かおうとした時だった。見覚えのある後ろ姿を見つけた。あの天然茶髪は明だ。

ドーナツは食べたいが、明に見つかりたくはない。

後ろ頭を凝視し過ぎたらしく、友達の方と目があつた。一瞬笑われたような気がしたが、明が不審に思わないうちに背後を通り過ぎることができた。目立たないように禁煙席の一番端のテーブルにいた。明達は喫煙席にいた。

明は吸っていなかったが、驚いたことに友達の方は煙草を吸っていた。今時煙草ごときで驚くような時代じゃないのはわかつている。大抵吸っている奴等は自意識過剰な臭いが鼻について、ハッキリ言つてガキっぽく見えるものだ。けれど明の友達はそういう風に見えなかった。かつこつけて無理に吸っている感じがしない。それが異様だと思つた。

煙草がかつこつけるためのアイテムではなく、ただの嗜好品として存在していた。コーヒーやドーナツと同じレベル。私服とは言え高校生が二人でいてそんなことでいいのか？ 友達がそんな風に煙草を吸っているというのに、明の方はそれが当たり前だという顔をしている。嫌がるでもなく、好奇心で一緒に吸うでもなく。

問題集とルーズリーフをテーブルに並べる。当初の目的を忘れてはいけない。おれは受験生なのだから。集中力を養う良いチャンスじゃないか。必死のプラス思考も空しく、ついつい明達を観察してしまう。

大人びていると思つていた明は、おれが思つていたよりも子どもらしい顔だった。どうも無意識に智美と比較していたようだ。友達の方と比べるとまだ子どもっぽさが残っている。さつき笑っていると思つた表情は、そういうわけでもなかった。気の抜けた顔というか、力が入っていないというか。あどけないと言えなくもない顔をしていた。

友達の方は弟を見るような、保護者のような顔で明を見ていた。

明の兄はおれなのでちょっとムツとする。見た目を気にする年にしては珍しく、コンタクトではなくハーフフレームの眼鏡をかけていて、それが似合っている。たぶん頭がいいんだろうなと思わせる顔で眼鏡をかけている姿は、如何にも怜悧という感じ。明といっても見劣りしないから、たぶんタイプは違っても顔も整っている方だろう。だけど冷たいイメージ。友達といてさえこんな顔なら、一人の時はどんな顔しているのだろう。笑顔とかできるのか？

何か話しているのはわかるのに、何を話しているのか聞こえない。店内を流れる楽しい音楽が邪魔する。チョコカスタードパイにかぶりつく明を見て、おれのドーナツの存在を思い出す。ゴールドンチョココレート、ゴールドンな黄色い粒々を零すのに注意。クリスピーサワーとパンプキンパイはいつの間に店から消えたんだろう。好きだったんだけど。おれは少数派だったのか。

こんなことじゃ全然気が紛れない。目に付いたので、とりあえずポイントをためてミストグッズをもらうスクラッチカードを削ってみる。四点がでた。手持ちのカードと合わせてもあと二点足りない。舌打ちしたい気持ちで顔を上げると、さっきまでいたテーブルから明がいなくなっていた。慌ててあたりを見回した。

幼なじみ

「どなたかお探しですか？」

慇懃とも言えるような丁寧な口調で、小馬鹿にしたような声がした。見上げる位置に明の友達が立っていた。にこやかに笑っているのに、友好的な感じが全くしない。

「…明を」

正直に答えている時点でもう終わってる。冷静に考えれば、初対面の相手に答える義務は全くなかった。ついでに、明がいなくなっていたからといって慌てる必要はない。むしろ集中を乱すもとながなくなったことを喜ぶべきだった。

器用にも非友好的な笑顔を浮かべる相手に気圧されてしまった。

本当にこいつは明と同じ学年？ ていうかおれより年下じゃないだろう？

「受験生？ よそ見してる場合じゃないんじゃないの？」

テーブルの上の問題集を取り上げて言う。

「気分転換の方法なんていくらでもあるんだしさ、ストーカーになつてるヒマはないでしょ」

自分がどういう状況に置かれているのか、理解するのが遅れた。

その間もそいつはおれを値踏みするように見下ろしている。

「！ おれは明の兄の大輝だ。犯罪者扱いされるようなことはやってない」

わかった瞬間、怒鳴った。それを聞いた時のそいつの顔は、なかなか見物だった。冷たく整った顔が崩れて、限界まで目を見開いていた。遠慮無く指をさして笑ってやった。

失敗を素直に認めてそいつは謝り、断りをいれてからおれの向かい側の席に座った。彼は明とは小学生の時から友達だそうで、新藤政人と名乗った。疑わしいけどやはり年下だった。ストーカー呼ばわりは悪かったと言いながら、たまにそうとしか思えない奴がい

るのだと危険情報を零す。明には危機感が足りない」と。

「あんたは明を気にしてるみたいだけど、明はあんたに懐いてる？」しばらく話して、ほんの少いうち解けたと思ったやさきの質問は痛いところをついていた。おれは明のことなんか気にしていないと突っぱねようかと思ったが、鼻先で嗤われるのがオチだと気付いて渋々懐かれていないことを認めた。

「明の父親は相変わらず無神経な人なんだな。もし再婚が去年から年だったら、明は今ほど動揺しないで済んだ」

母親も来年まで待つべきだったと言っていた。母親はそれはおれのためだと言ったけど、こいつは明のために待つべきだったと言っている。今年でも来年でも明にとっては何も変わらないはずなのに、状況が変わるのはおれだけのはずだ。

「どういう意味だよ」

「そのままの意味。明に高三の兄貴は一人で十分なんだ。来年まで待つのが無理でも、せめて秋までは待つべきだった」

「何言ってるんだよ。明の兄貴はおれだけだ」

嫌な間が流れた。手持ちぶさたなのか煙草を取り出して、禁煙席の表示を見つけて溜息をついた。それから、本気かよと呟いた。その言葉は聞かせるつもりで言ったものではないようだったが、しっかり聞こえてきた。

「おれは本気だ。それともなにか、明におれ以外に兄貴がいるって言うのか？」

「俺が正気を疑うのはあんたじゃなくて明と、明の父親だよ」

不自然なくらいおれの顔を凝視してから、眼鏡を直す仕草をした。

「なんにしても俺、不味いことしたな」

「ハッキリ言え、何を隠してる」

隠し事には隠されるだけの理由があるんだよ、と新藤は言葉を濁した。

「ストレスの溜まるしゃべり方するなよ。明だけで十分だ」

どこがおもしろいのか理解できないが、新藤が笑い出した。

「なんだ、思ってたより懷かれてるんだ。心配して損した」

明のしゃべり方が新藤同様おれにとってストレスになるということが、どうやって懷かれているということになるのか、理解不能。頭のいい奴の考えることはわからない。

「明はどうでもいい相手の前だと猫かぶるから。だいたい相手が明に持つイメージ通りに行動してる。自分がどう思われてるかとかそういうことに敏感なんだ。ヘンに反感持たれるより楽だとか言ってたな」

明の存在自体がおれを苛立たせるのは、明がおれをどうでもいいと思っていないから？ それならいつそどうでもいいと認識してくれていた方が良かった。その方がおれは楽だったのに。上手くない。

「おまえも猫かぶってるのか？」

まさかそれでかぶっているとは思えないと言外に含ませる。ストーカー呼ばわりのちよつとした仕返した。

「俺は俺、明とは違う。違うからこんなに長い間友達やってられるんだ、たぶん」

新藤は皮肉に気付かないふりして、あっちゃんまあくんと呼び合った仲だと自慢した。自慢になっているのかは不明。自慢というものが羨望とセットでできあがるなら、絶対に不成立。

一区切りついたと判断したのか用件が済んだのか、新藤が席を立った。行く前に携帯番号を聞かれて聞き返した。自分のだけ知られるのは気持ち悪い。携帯番号を交換してる様子を端から見たら、きっと仲良さそうに見えるのだろうと思った。

冗談のつもりなのか、教えてくれたお礼にとスクラッチカードをくれて、新藤は店を出て行った。おれはクーラーで冷めてしまったコーヒーを飲んで勉強を再開した。

店は中途半端に空いていた。店員も暇なのかコーヒーのおかわりをどんどん持ってくる。長居しすぎて嫌な顔をされるようなことはなかったが、お腹がコーヒーでちやぶちやぶになってきた。解けな

い問題に当たるとすぐコーヒーを飲む癖は、直した方が良さそうだと解けるようになればいいだけか。癖を直す方が早そうだと。

アドバイス

新藤のおかげで十点溜まったカードを、ミスドグッズと交換して帰ることにした。でかい鞆を持ってきていてよかった。ミスドグッズは必ず半透明のビニール袋に入れて渡される。中が丸見え。十点溜まるほどミスドに通っていることを宣言しながら歩くようで恥ずかしい。自分で気にするほど周りは気にしてないと思うけど。高三の男がピングーのブランケットをもらって喜んでいると思われるのはさすがに。実際もらえると嬉しいし、欲しかったんだけどそれでも。

緑がかった水色のブランケットを鞆にしまった。達成感はあるが使う予定はない。学校で女子の一部が膝掛けにしているのは知っている。まさかおれが膝掛けにするわけにもいかないだろう。おれには似合わない。ピングーはかわいい。

外に出ると日はだいぶん傾き、まだ十分明るい。太陽に昼間ほどの勢いはなくなっていた。涼しくはないが蒸し焼きの刑と直火焼きの刑は免れた。ピングーブランケットの入った鞆をカゴに入れ、自転車をこいで家に帰った。

家に入ってただいまを言っても返事がなかった。一階の窓が全部網戸になっているから誰かはいるはずなのにと思っていると、妹がしゃべっている声がした。電話かと思つて二階の自分の部屋に行く時、妹の部屋をのぞいてみた。そこには誰もおらず、明の部屋から声が聞こえた。ドアは開けっ放しで、智美が明に宿題を見てもらっているのがわかった。

妹は明を明兄ちゃんと呼んでいた。明は妙に楽しそうに見えた。ミスドに新藤と一緒にいた時より明るい感じがした。

足音に気がついたのか、二人は同時に振り返っておかえりを言った。嘘つき、二人の何気ない笑顔を見て思った。ぶっきらぼうに言葉にならない返事をして、自分の部屋に行った。

智美はあんな明を望んでいるのか？ アルカイクスマイルの兄を。どちらかと言えば楽しそうに見えるから、アルカイクスマイルじゃないのか。でも中身のない笑顔なのは確かだ。順調に家族することが大切で、妹にとって中身はいらないものなのか。

その選択が間違っているとは思わない。楽だろうと思うし羨ましくもある。おれには最初からその選択肢が除外されていた。明に兄貴はいらないから。今日会った新藤もそう言っていた。おれって何？

なんで明は父親の再婚に反対しなかったのだろう。兄貴ができるのは知っていたはずなのに。

苛々しながら数学の問題集を広げた。楽しげに響く妹の声が耳障りで、MDウォークマンをつけた。おれは自分を現実世界から切り離した。

架空の世界の話。線には長さはあっても太さはない。点に面積はない。面には厚みがない。自乗して2になる数字って何？ ゼロは存在しない数字なのにそこにある。ないところからは何も引けないはずなのに、マイナスの数字がある。概念だけを弄くり回す。こんなことして何の意味がある？

現実は何の意味もなくとも、受験には必要。勉強は学力同様に忍耐力を育てる。たぶんそういうこと。

一息いれに一階に下りていくと智美がいた。自分の分のついでだからと、おれにもお茶を淹れてくれた。おれのお茶を淹れてから、自分の湯飲みを持ってソファーに陣取る妹を見て、しゃべりたいことがあるのが察せられた。今日はカフェインの取りすぎかもしれない。無言で話を促した。

「明兄ちゃんに宿題見てもらっちゃった。お兄ちゃんより教えるの上手だったよ」

「よかったな、これからわからない時は明に見てもらってくれ」

わざと突き放した言い方をした。それでも妹はめげない。

「部屋、初めて入ったけどすごいきれいな。下手したら私の部屋よりきれいだよ」

お兄ちゃんとは大違いと言って笑った。掃除が嫌いだからその言葉を甘んじて受ける。学校がプリントを配りすぎるせいもあると思う。それにルーズリーフ。順番に並べてファイルするのは結構面倒だ。でもノートは何冊も学校に持っていくのは重い。

「窓の所にね、青いびんが並べてあるの、意味深に。触ろうとしたら怒られちゃった」

「大事なものだったんじゃないのか？」

「もとはアメの入ってたびんだって言ってたよ」

ただのびんコレクターかもしれないじゃないか。どういう趣味していようと明のかつてだろう。びんの一つや二つ、好きに並べさせてやれ。妹は期待したより反応の薄いおれを不服そうに見た。

「智美は明という時、何話してる？ 顔会わしても気まずいんだだけ」と

唐突に話題を変えた。明の趣味を詮索するのは気が咎めたし、何を話せばいいのかわからないのも本当だ。

「何話そうか考えるから何も話せなくなるんだよ。深く考えなければ大丈夫！」

動かし慣れてない脳みそなんか使おうとするからだめなんだよと薄く笑う。兄としてのおれの尊厳ってゼロ？ お兄ちゃんは悲しい。「夏休みの思い出とか、遊びの計画とか、宿題終わったかとか、そういうの聞いてみたら？ 話すきっかけくらいにはなるんじゃない？」

頬に手を当てて考え込むように具体的アドバイス。妹はおれに抽象的なことを言っても意味がないことをよくわかっている。わかっているのもちよつと哀しい。智美はアドバイスが終わると、自分の仕事は終わったとばかりにおれの肩を叩いた。ノンバーバルコミュニケーション、言いたいことはよくわかる。つまり、覚悟を決めて実践に突入せよ。

青いびん

気が重い。家の階段はこんなに長かったっけ？ ミシミシと抗議の声があがった。

中が見えない程度に細く開いたドアを、軽く叩いて開けた。中から慌てている気配がすると思った時にはもう、ドアは全開。中で明が白い紙を畳もうとしていた。

「ノックしたら返事があるまで普通は待つよ」

気まずさ最高潮で立ちつくすおれに、明は不愉快そうな目を向けた。この時、考えなければ大丈夫という妹の言葉が頭の中を過ぎる。明が怒っていることよりも、隠そうとしていた紙が気になる。

「それは悪かった。なあ、その紙何？」

視線を手元の紙に落として、明は逡巡した。

「手紙。昔もらったんだ」

「彼女とか？」

ためらいを残したままの返事に、おれは反射的に聞いた。現在おれには彼女がいない。弟にいかどうかは重大な問題だ。おれの問いに、なぜか明はほっとしたような顔をした。

「違う、そういうのじゃない。…この間、久しぶりに会ったんだ」

どこまで信じて良いものか。親しい間柄ではあるらしい。もっと詳しく知りたいけど、明はあまり話す気がなさそうだ。せつかく不機嫌な顔じゃなくなったのに、また険悪になるのは避けたい。話題を換えたい。

窓の方を見ると、妹の言っていた通り青いびんが並べてあった。一つや二つ放って置けと智美の話を聞いた時は思った。びんは三つだった。全部同じ形の真っ青のびん。一つだけ空で、後の二つには三分の一くらい白っぽい欠片が入っている。

「これか。さっき触ろうとして怒られたって智美が言ってたのは。大事なものの？」

「思い出かな？ 一番左はずいぶん前に、手紙の人と一緒に拾った海の破片が入ってるびん。…小さい頃は海岸で拾う白い欠片を、僕は海の一部だと信じてたんだ。真ん中は三年前にその人にもらったびん。どうしても一緒には拾いに行けなかったから、一人で拾いに行った」

海岸で拾う白い欠片。明はびんコレクターではなく、貝がらコレクターだった。それにしてはびんの中身の貝は原型を留めていない。「これ、貝か。言われなかったら絶対わかんなかった。もつときれいな形の集めたりしないか？ フツ」は

触らないように注意してびんをのぞき込むおれに苦笑して、明は真ん中のびんを手にとって顔の高さに掲げて見せた。青いガラス越しに明の顔が見えた。海の中を連想した。明もこの部屋も全部、貝が沈むはずだった海の底に沈んでいく。

「貝には見えない、本当に。でも割れたのをわざと集めたんだ」

現実に戻された。ハツとした顔をしたであろうおれに、明は首を傾げてびんを横に振った。硬い、痛そうなお音がする。

「声が、よく聞こえるように」

「何の？」

もちろん貝のだ。聞くまでもない。それなのに聞かずにいられたかった。そのびんの音は不思議な錯覚を呼び起こす。

貝殻を耳に当てると、海の音が聞こえるでしょう？

小さい時に智美が母親に読んでもらっていた絵本の一節を思い出す。おれはそこしか知らない。どういう話かは興味がなかった。でも、少し哀しい話だった気がする。記憶違いかもしれない。

明は何も答えないで、ただ微かに笑った。

夏を告げる

入道雲が遠くに見える海岸で、白い破片を拾い集める。隣で一緒に拾う人を見て、すぐにこれが夢だとわかった。見上げていたはずのその人を、同じ目線で見る不思議。自分は過ぎた時間に比例して成長している。その人は最後に見た時のまま。

声を出したら、夢が壊れてしまいそう。話しかけたいのは何も言えない。

その人が名前を呼んだ。懐かしい声。うれしくて、返事をせずにいらなかった。

夢が溶けた。

再構成された夢は、また違う夢。

薄青い無音の町、ホログラムのように微妙な色合いで光を放つ建物が並ぶ。熱くもなく、冷たくもなく纏わりつく大気が気怠く重いけれど同時に、たゆたうような安らぎがある。遙かな頭上に、ゆらゆらと光る境界。静止しない光の天井が見える。

そこで自分が海の底に沈んでいることを知る。この青さは微かな光しかないこの場所での闇だとわかる。輝く水面に上がりたいと思う。痛いほどの太陽が恋しくなる。この青い世界はあまりに静かすぎる。このまま心地よい水の中に溶けていってしまいそう。ここは全てに満ちた場所だから。自分と呼ぶ場所だから。

それでも、ここににいるわけにはいかないと思う。浮かび上がろうと勢いをつける。振り向くと、有無を言わせない白い手が腕を掴んでいた。ゴボツと大きな気泡が口から漏れる。全身で抗うのにどうしても抜け出せない。もがけばもがくほど口から空気が逃げていく。手に強い力が入っているようには見えない。柔らかそうな女の手。自分の背が、女の胸までもないことに気が付く。自分の腕が頼りない細さなことに驚く。子供の視点で女を見上げた。女の顔は青く影って判別できない。長い髪が括られたまま逆立っている。

なだめようとしているのか、女が歪んだ形の飴を取り出す。食べさせようとする。その形は鱗を連想させた。金色がかったその白い飴を食べてはいけない気がする。戻れなくなる。根拠もなく強く思う。

苦しくてたまらない。息ができない。

急に腕を掴む力が消える。水面ばかり見詰めていた目を、もう一度女に向ける。女に取り縋る男がいた。その人を見たたん、もがくのを止める。戻れなくなっても構わない。

手が放れても海底から逃げようとしないうちに自分を、その人が突き飛ばす。それまで存在しなかった浮力に囚われる。急速に体が海面へ引き寄せられていく。

遠ざかっていく女や町が曖昧に溶けていく。溶けだした夢の中で、ほんの一瞬男の顔が見える。それなのに誰の顔だかわからない。見たことがあると思うのに。忘れるはずのない顔なのに。彼が誰かわからない。

寝起き

郵便受けに明宛の暑中見舞いが来ていた。差出人は白取秀臣。新藤ではない。裏返してみると崩し字が混じった文が書いてある。おれには解読できない。同年代じゃないとわかった。もう一度ひっくり返して見てみる。差出人の住所の市の部分が、この間行つた駅名と同じだった。明の祖父が住んでいる所だ。

その住所を携帯にメモした。常に持ち歩くものだから、写したものを見られる危険が少ない。手紙の内容を読んだわけじゃない。それでも悪いことをしているとは思った。ばれないように隠さないといけない。

はがきはそのまま玄関に置いておいても良かった。だけど靴で明がいるのがわかったから、直接渡すことにした。そのはがきを手に持っている現在への言い訳に。

涼しいことを期待して入ったリビングは、クーラーが切れていて涼しくなかった。そこに明が寝ていた。ソファで昼寝。寝ている内にクーラーが切れてしまったのだらう。明は汗をかいてうなされていた。

寝ているのを見つけて、音を立てないように気をつけてはみたけれど、うなされているなら起こした方がいいだろうか。悩むところだが、とりあえずクーラーをつける。部屋が冷えてくると明は静かになった。このまま寝ていたら、風邪を引くかもしれない。汗をかいた後なら余計に。何か掛けた方がいい。でも何を？

昨日おれはピングーブランケットをもらった。ソファの前のセンターテーブルにはがきを置いて、自分の部屋にブランケットを取りに行く。明ならピングーも違和感がない。思っていたよりも早く使える時が来た。

そつとブランケットを掛けると、それが合図だったみたいに明が目を覚ました。

「悪い、起こしたな」

「…大輝さん？ えーと、これどうもありがと」

まだ夢を引きずっているのか、少しぼーっとした顔をしている。

「あと暑中見舞い来てたぞ、そこ置いた」

ブランケットを肩に掛けたまま、緩慢な動作ではがきを手に取って読んでいる。よく読めるものだと思ひに感心する。しかし兄としての沽券に関わるので顔には出さない。弟に読める物が、兄に読めないわけにはいかない。見栄をはるのも年長者の仕事だ。

「さっきまでうなされてたけど、怖い夢でも見たのか？」

反動で少し子ども扱いしてしまう。反論するかと思われた明がおとなしく頷いて、おれは動揺した。おれの顔を見ていた明がいくら寝起きでもその同様に気付かなかったはずがない。

「怖いって言うのとはちよつと違う。でもいい夢じゃない。もやもやした感じがまだする」

そろそろ慣れてもいいはずなのにと、フォローになっているのかいないのかわからないことを言う。その言葉をおれは聞き咎める。「慣れる？」

また明が頷く。おかしい。こんな素直な明は変だ。

「毎年夏になると似たような夢を見るんだ。三年前から少し変わったけど。だいたい夏休みが始まってすぐくらいに見てた。今年は遅かったんだ」

そこで一旦言葉を切ってから、もう見ないと思っていたと付け足した。

どんな夢なのか詳しく聞きたかった。弱っている今なら聞けるかと思つた。妙に素直なのは、きつと弱っているせいだと思つた。明にこんなにダメージを与えられる夢に興味がある。

「買い物帰り？ 今日の夕飯何にするの？」

根ほり葉ほり聞き始める前に、明は話題を換えた。先手を打たれた。むつとして外した視線の先に暑中見舞いがあった。それについての罪悪感を思い出す。明にばれないようにと祈りつつ、新しい話

題に乗った。

「今日の夕飯はオムライスとコンソメスープとトマトサラダ。期待していいぞ」

「うん、じゃあそうする」

さっきまでの話を打ち切ることが目的だったらしく、明はそれ以上何も言わないでテレビをつけた。話す気がないことを態度で示されて、折れたことが悔やまれた。

今日おれが夕飯を作るのには理由がある。因みに昼食は明が作った。今年初の冷やし中華はおいしかった。夕飯は負けない。

母親が今日は家にいない。再婚を期にそれまで勤めていた会社を辞めて時間が出来た。それがうれしくて仕方ないらしい。時間がないとできないこと。これが今、母親の中で大ブーム。この間のスフレもその一環。今日は更に発展して学生時代の友達と一泊旅行。山だか高原だかへ行っている。暑いからだそうだ。今頃、テニスでもしているのだろう。避暑地のイメージはそれしかない。しいて挙げればあとは白樺とソフトクリーム。

新婚なのにお父さん置いていっていいのかよと言ったおれに母は行っておいでって言ったのは要さんよと反論した。新婚なのに仕事があつて一緒に旅行もいけない。そのお詫びらしい。別に気にしなくてもいいのにつて私は言ったのよ？ と母は言うが、どこまで信じられたものだか。気にしなくて良いと言ったのは本当だろうが、行っておいでと言うように仕向けた上でのことに違いない。お父さんが母親に口で敵うはずがない。女は強い。

早いかとは思ったが、智美が帰ってきたらすぐに夕飯に出来るように卵を焼く以外は済ませておくことにした。部活の後というのは無性に腹が減る。手早く食べ物を与えないと妹は凶暴化する。人間、腹が減ると機嫌が悪くなるものだ。けれどおやつがあるのだから、それを食べればいいとおれは思う。妹に言わせるとそれは、お兄ちゃん全然わかってない！ ということらしい。ダイエットもイヤだし、太るのも絶対イヤ。それで間食ができないという。目の前に食

べ物があるのに食べられないというのは、もの凄いストレスを感じる状況で、八つ当たりせずにはられない。

迷惑極まりない話だ。少しぐらい太っていったっていいじゃないか。スタイルも大事だが、同じくらい性格も大切だ。スカートから見える細い足が自慢の妹は、そんなおれの言葉を聞きもしない。

夕飯の準備を終わらせて、勉強をしに自分の部屋へ上がる。料理は作ればできあがる。勉強はどこまでやってもきりがない。難しい問題はいくらかもある。やればやるほどわからなくなる。ここまでできたら大丈夫、そういう基準が曖昧で、勉強しても不安が拭えない。

長いはずの日が沈んでいく。思考がブルーに傾いていくのは、きっとそのせいだ。西向きの窓から、真っ赤な夕日が見える。ここに引っ越してきてから見た中で、一番鮮やかな夕日。

自転車のブレーキ音が響いた。妹が帰ってきたに違いない。フライパンを温めて卵を焼こう。凶暴化した智美に八つ当たりされる前に。

ドアの開く音に続いて、ただいまの声がする。案の定妹だ。早いところ夕飯を仕上げよう。

家庭訪問

明くる日、蝉の声が空気を飽和状態にしているなかに立っていた。白取さん宅前。来てはみたものの、インターフォンを押す勇気がでない。昨日のはがきの住所を頼りにここまで来た。駅に着いた時点で、引き返そうか迷う気持ちはあった。定期が使えるからと、深くは考えずに来たけれど。

駅からどちらに向かえばいいかもわからなかった。駅の中に地図はない。二択で東口から降りたら、目の前に交番があった。今日のおれはついていて、その時確信した。交番に入るのは緊張したが、住所を言ったら道を調べて親切に教えてくれた。

教えられた通りにしばらく歩くと、急に視界が開けて海が見えた。夏だというのに海水浴客は見あたらず、遠くの方にサーフボードに乗っている人が何人が見えた。波打ち際で服を着たまま遊ぶ親子連れもいた。明が貝拾いをしたのは、きつとこの海岸だろう。今はちようにど干潮らしく、波打ち際から砂の方へ向かって、いくつも白い横縞がみえる。縞を作る白い点、その一つ一つがたぶん貝だ。

海岸沿いを少し歩いた後、海から離れて更に進むと巨大な住宅街が出現した。来たことをそこでまた後悔した。住宅街の中は、目印になる物が少なく入り組んでいる。ここまで順調に来たけれど、これは絶対迷う。そして並々ならぬ苦勞と自分への方向音痴疑惑とともに、白取さん宅前に立つ。この時には随所に公園が配された、よく整備された住宅街だと非常に理解できていた。ぐるぐる歩いたおかげで。

もう五分くらいここに立っているだろうか。自転車一台、おれの背後を通り過ぎた。挙動不審な人に見えただろう。白取さんにも迷惑だろうし、おれも暑いし疲れた。意を決してチャイムを鳴らした。

「はい、どなたですか？」

微妙な間の後に男性がインターフォンにでた。

「矢島大輝と言います。明君のお祖父さんのお宅ですか？」

「矢島？ 明君のお兄さんか。今開けます」

一ヶ月前まで苗字が違っていたから、改めて矢島大輝と名乗るのは妙な感じだった。緊張するというか、照れくさいというか。

玄関から出てきた明のお祖父さんは、白い頭の優しそうな顔をした人だった。

クーラーの入った涼しい部屋に通されて、グラスが汗をかきそうな冷たい麦茶を茶托でだされた。茶托を見て緊張が高まった。家庭訪問の時しか使わないあの茶托を、おれが使うことになるとは。おれは不幸と成績を運ぶ先生？ お祖父さんがおれを大事な相手だと認識しているのが伝わってきた。冷静に考えて、娘の離婚した旦那の嫁の連れ子が一人で訪ねてきたんだから普通じゃない。文字通りオオゴトだ。

「…それで、大輝君はわざわざどうしたのかな？」

おれが麦茶を飲んで一息つくのを見計らって、当然の疑問が口にされた。

「お聞きしたいことがあつてきました」

できるだけ丁寧な言葉遣いを心がける。お祖父さんの表情は動かなかった。身構えるようなそぶりも見せない。

「私に答えられることかな？」

「たぶんわかるはずです。両親の再婚が、来年の方が良い理由に心当たりがありませんか？」

お祖父さんは心底意外そうな顔をしてみせる。

「どうして？ 私が口を挟む事でじゃあないが、それは今年で構わなかったと思うよ？」

またはぐらかされる。母も新藤も今年じゃダメだと言いながら、その理由をハッキリ教えてくれない。言わないと決めているなら、二人に聞いても無駄だ。だからと言ってお父さんと明にも聞きづらい。違う意味でもの凄く聞き難い相手であるお祖父さんを訪ねてき

たのはそのためだ。

「おれが高校三年だから。明にはそれが良くないと言われました。どう関係しているのか教えてもらえますか？」

偶然

「…それを誰に聞いたか知らないが、きつかけになることを怖れているのだからなあ」

考えるそぶりの後の言葉は更におれの疑問を深めた。きつかけつて、一体何の？

「私にはきつかけになるとは思えないが。それより明君が暗くなつてから外に出ていることの方が心配だよ」

おれが口を挟む前に話は進められた。やはり明の祖父だけある。

「明も高校生ですし、うるさく言うほどのことじゃないと思います
が」

「そう、明君ももう高校生だ。だから、特に夏は気をつけないといけない」

「夏は？」

凄く含みのある言い方をされた気がする。反射で聞き返した。聞き返されてお祖父さんは少し慌てた。聞き返されたくないことだつたらしい。つまり、言つてはならない本当のことを言つたのだ。

「…夏は、気温のせいか変質者が多いからね」

苦しい言い逃れ。言つた本人もそう思っているようだ。とにかく明のことをよく見ていて欲しいと頼まれた。

どうせこれ以上は聞けないと判断して、早々に帰ることにした。またいつでもおいでと言いながら、お祖父さんはあからさまにほつとした顔をしている。たぶん、おれがここに来ることは二度とないだろう。

帰り道は早かった。汗をだくだくにかきながらウロウロした団地を抜けて、海岸まですぐに出られた。海岸に出れば後は道沿いに歩けば駅までつく。まだ日が高く、じりじり暑い。道路から砂浜に降りていくことにした。子どもじゃないけど、この夏初めての海で何のアクションも起こすなと言う方が無理。どこかの家族連れじゃな

いけど、裸足になって海に少し入るぐらいはしたい。だって夏だし。砂浜は忘れかけていた独特の感触。靴のままは歩きにくい。道路から捨てられたゴミが危ないから、出来るだけ靴で歩いた方がよいと思う。波打ち際に近づいてから靴も靴下も脱いで、足首まで水に入った。

冷たい。波の寄せる場所で立ちつくし、足の下で砂が流されていく感触を味わう。不安定だけどおもしろい。砂のせいで、水がさらさら流れていくように感じる。

一人で堪能した後、乾いた砂を歩いて足を乾かそうと思って水から出た。まだ濡れている砂を踏んで歩こうとした。一歩目で軋むような音がして、尖った物を踏んだ。傷が出来るほどではない。でも痛い。足の下に白っぽい貝の破片がいくつもあった。見回すとそこはちようど、うち寄せられた白い破片の線の上だった。

どこまでも続くように思える白線の向こうから、ゆっくり歩いてくる人が見える。

「明？」

お祖父さんの家ではち合わせしなくて良かった。自分のことは棚に上げ、どうしてここにいるのだろうと思った。

「見たことある人がいると思ったら、大輝さんか」

強い日射しを浴びて、茶色い髪も色素の薄い肌も透けて、そのまま光に溶けてしまいそう。さっきまで感じていた波の、足下の砂を運び去る感触。それが急に不吉なもののように思い出された。おれで悪かったなという憎まれ口をきくのも忘れた。

「こんなところで何やってるの？」

裸足のままのおれを見ながら、楽しそうに明が言った。

「見たまま。知り合いに会いに来て、早く終わって、そこに海があったから」

子どもっぽいかと思いつつ。五分の一の嘘を混ぜて。その嘘がばれないように、明こそ何やってるんだと聞き返した。

「渡したい物があって友達に会いに来たんだ。今はその帰り。引つ

越す前はこっちの方に住んでたし」

「このまま帰るんだったら、一緒に帰らないか？」

明は機嫌良くすぐにいいよと言った。この機嫌の良さは、久しぶりに友達に会ったおかげだろうか。できるだけちよくちよく会って欲しいものだ。

電車の中で、初めて普通に二人で話した。たわいない会話を二人だけで。おれは緊張していた。明はリラックスして見えた。ホントのところはわからないけど。

話題は明が引っ越す前に住んでいた場所のこと。今日使った駅は家から遠くて、その時は使っていなかったが、線の関係で今の家からは使っていた駅は遠いとか。知っていても得にも損にもならないようなこと。妙に楽しそうに話すから、相づちをうちながら素直に聞いた。

明が黙ったと思ったら、肩のあたりが重くなった。目線だけ動かして見てみると、おれにもたれてうたた寝していた。俯き加減で見えるまつげが長い。寝顔は年より幼い感じ。

重い。だけどそれが特に嫌なことだとは思わなかった。むしろ気を許された証拠のような気がした。おれの肩にかかる茶色い髪をちらちら見ながら、身じろぎしないように気をつける。動いたら起きてしまう。動いてはいけない。いけないと思うと動きたくなるのは、なぜだろう？

降りる駅まで明は起きなかった。昨日はソファで昼寝をしていた。夜、ちゃんと眠れていないのかもしれない。少なくとも受験勉強をしているはずのおれよりも遅くまで起きているのは確かだ。おれがベッドに入ってウトウトし始める頃に、階段を下りる足音がする。上ってくる音を聞く前に熟睡するから、その後のことは知らない。

「起きろ、着いたぞ」

言いながら肩を揺する。言っていることは普通なのに、何となく照れた。弟の面倒をみているという感じがするからかもしれない。

質問

『再婚が来年の方が良かった理由を教えろー！』

家に帰ってから、新藤にメールを打った。明のお祖父さんに聞いても教えてくれなかったから。きつけを作った奴に責任を取ってもらうことにした。携帯の番号を聞き返しておいて良かった。

家族であるお父さんに聞いて、家の雰囲気を変質するのは怖い。明は本人だから聞けない。母親に、隠そうとしている母親に聞くのはかわいそうな気がする。妹はたぶん知らない。わざわざ不安にさせることもない。

家族にしか話せないことがあるのと同様に、他人にしか話せないこともある。おれは他人にしか、来年が良かった理由を聞けない。

隠し事には隠されるだけの理由がある。新藤はそう言った。その理由は検討もつかなくて、おれを怯えさせる。理由が持つはずの重さと、そのせいでできる歪みにどれくらい影響力があるだろう。

『メールとか電話じゃ無理。直接会わないとだめ。たぶん長い話になる。明日予定あいてる？』

受験生に遊びの予定が入っているとでも？ 暇じゃないけどとってもヒマしている。勉強は好きじゃない。

『あいてる。どこで待ち合わせ？』

四つ向こうの駅、改札を出たところで待ち合わせをすることになった。新藤に話す気は本当にあるのだろうか。約束はしたものの、不安が残る。一応この件は明日まで保留。

明の部屋のドアを叩く。今回は返事を待つて開ける。

「どうかしたの大輝さん？」

「あのさ、おまえ夜眠れてる？」

直球で聞いてみた。昼間寝ている以外にも、顔色が良くないことに気が付いた。海岸で明を見た時、不吉に思った理由がそれだった。明の顔は白すぎた。蛍光灯の明かりで見ても、青いとまでは言わ

ないが赤味が全くない。体がどこかおかしくなっている。

「どうもないよ？ 急だね」

「…ならいいけど。絶対無理するなよ」

平気な顔で気軽な調子で言うから、おれは自分の言葉を引っ込めた。おれがいくら言っても、こいつは否定しかしないとわかっていくからだ。表情を見ればそのくらいのこととはさすがにわかる。落착かない気持ちになって目をキョロキョロ動かした。部屋の中は相変わらず整理整頓の見本状態。自分の部屋と比較するのが怖い。

整理されすぎていて居心地が悪い。この部屋には物が極端に少ない。このぐらい物がなければおれでも整理できるだろうか。ただその前に、おれはこんなに物を減らせない。今持っている物は全部、おれには価値のある物だから。がらくたもある。それだって意味のある物。

窓辺に並んだ青いびんに目が留まった。この部屋では数少ない鮮やかな色。それが二本しかなかった。あるのは中身の入ったびんだけで、カラのびんがなくなっている。

「びん一本ないけど、どうした？」

「んー、あげた。どうして？」

目を泳がせて考えてからの返事。きつと貝拾いを一緒にした人にあげのдарう。最近になって再会したようなことを一昨日言っていた。今日のお出かけはきつとその人だ。言いにくそうだからやっぱり彼女か？ 羨ましい。

「別に、集めてるのかと思ってたから」

「集めてたんじゃない。集まっちゃっただけ」

集まるようなものか？ と思いながら、明の部屋のドアを閉めた。ドアが閉まる瞬間まで明はずっと笑顔だった。機嫌がいいのは今日会った相手のおかげか、寝不足でハイになっているかのどちらか。どちらかもしれない。

回答

新藤と会う日、指定された駅で降りた。初めて降りる駅。約束の時間にはまだ少し早い。新藤は来ていない。時計ばかり見ながら立っていた。

昼食を摂ってから家を出てきた。妹の部活が今日はない。旅行から帰ってきた母の土産話を聞きながら、四人で食べた。その席で午後から出かけると言うと、妹と母親に呆れたような目で見られた。

「何で天気が悪い時を狙って出かけるかなあ？」

「今日の夜は台風上陸だから、午後から雨よ。早く帰ってきなさいね」

ここのところテレビを気にしていなかったから、天気予報も見えていなかった。台風と聞くと夏も終わりという感慨が起こる。

台風が来る。今日を指定したのは新藤だが、彼には悪いことをしたかもしれない。絶対に今日聞かなければいけないというわけじゃない。日を改めるべきだろう。でも日を変えたせいで、新藤の気まぐれで変わったら？ すっきりしない状態のままでいなきゃいけない。なる。

だからおれは会う前に改めて連絡をとろうとはしなかった。それでおれは時計ばかり見ている。本当に来るのかと思いながら。そう言えば昼食の時、饒舌な母親と反対に、明はほとんど何もしゃべらなかった。

見上げた空は灰色。窓に水滴がいくつか。午後からの雨がいつの間にか始まっていたらしい。午前中は曇っているだけだったのに。

「あ、待たせた？」

時間通りに現れた新藤はおれを見つけると言うた。

「いや、大丈夫」

なら良かったと言いなから歩き出す新藤に、どこに行くつもりだと尋ねた。目的地があると思っていた歩みは止まって、どこに行こ

うか？ と振り向かれた。微妙におれより身長が高いことに気が付いた。年下のくせに。

「雨の日の公園だったら人がいなくていいかと思ったんだけど。よく考えたら台風来るっていうのにそんな所いられないよな」

「人に聞かれたらマズイのか？」

何言ってるんだという顔をされた。

「聞かれない話だと思つか？」

内容を知らないのにそんなことを言われても困る。おれにも隠すような話だから、いい話じゃないのは見当がつくけど。それに現場を明に押さえられるようなことになっても困る。聞いて回っているおれの立場も教えている新藤の立場も悪くなる。

人目に付かない場所がいいというのはわかった。それなら、二人でいても目立たない所なら良いはずだ。だから逆の発想で人の多いところ。似たようなものがたくさんある中に紛れ込めば目立たないはず。きっとそれも見つからない方法の一つだ。

屋根と壁があって同年代の奴等がたくさんいる長居できる場所。

駅の目の前にあるファーストフード店に入った。二人とも飲み物だけ買って、二階席に上がった。外から見える可能性のある窓際の席は避けた。

最初に聞いておきたいことがあると、席に着くやいなや言われた。「矢島大輝はこれを受け取れますか？」

フルネームで呼ばれて余程大事なことだろうと思って見る。ポケットから出されたのは、青いびんだった。手のひらの中に収まりそうな小さなびん。

「明にもらったのか？」

明はこれを大事にしているようだった。それをあげた相手が目の前の男。新藤に軽い嫉妬を覚えながら尋ねた。

「質問してるのは俺。これを受け取れますか？」

おれの問いに答えない。硬い口調も崩れない。今問題になってるのはびんだ。それはそんなに真剣になるほど大事なことになるのか？

「昨日俺は、明に持っていてくれって渡された」

「ならおまえが持つてればいいんじゃないのか？」

新藤の問いに答ええないおれに業を煮やして、彼は先におれの質問に答えた。何を焦っているのか理解できなくて、おれは気軽な調子でそれに返事した。彼は苦いものを噛んだような顔になった。

「あんたは自分で明の兄だと言った。自分の言葉ぐらい、責任持てよ」

一度テーブルの上に置いたびんを手取る。その手にかなり力が入っていることは、見ていただけでわかった。握りしめたびんをつらそうに一瞥すると、おれに向かって突き出した。躊躇していると、促すように突き出す動きがもう一度くり返された。

おれはわけのわからないまま、青いびんを受け取った。新藤の体温が少し移って、冷たくはなかった。

「結論から話す。高三の夏に、明の兄貴が死んだ。台風の日だった」

解説

長い話が始まった。おれの知らない矢島明の家族の話。明から聞いた話と自分の想像だと断りを入れて、新藤は話を始めた。それはお父さんの話から始まった。

「何で明とその父親はあんなにお互いに無関心なのか、不思議に思ったことがないか？」

特に嫌いあっているわけじゃない。お互いを出来る限り無視している。

「明は母親似なんだ。兄貴の方も母親似。よく似た兄弟だった」

母親は写真でしか見たことがないが、兄貴の方には会ったことがあると言った。

「父親が明に無関心でいようとするのは、母親や兄貴に似てるからなんだ」

それは理由になるのか？ それを理由に束縛することはあっても無関心になろうとするのか？ 離婚するぐらいだから仲の悪い夫婦で、相手の顔も見たくないとかそういうこと？ 子どもにとって非常に迷惑な話だ。思うところはいろいろあつたが、全部話し終わるまで何も言つなと言われているから黙っておく。

「明が父親を無視するのは、兄貴が父親を嫌っていたから。その原因までは知らない」

家の中で父親に遭遇すると驚いてしまうくらい、父親は家にいなかったらしい。しかも明にとってはそれが普通だった。父親は外にいる人だと最初から認識していたという。仕事だけをする生き物。

「明の記憶の中に母親はいない。父親はいてもいないのと同じだった。その分、あいつはブラコンなんだ」

ブラコンと言ってから新藤はニヤツと笑った。

ブラコン呼ばわりされるのは、誰にとっても嫌なものだろう。おれがもしシスコン呼ばわりされたら、たぶん相手が誰でも怒る。だ

けど新藤の言い方は揶揄するような響きをまもっていても、本質は違うのがなんとなくわかる。幼かった明にはブラコンになる必要があったのだ。

「明の兄貴、朋さんはしっかりした人だった、少なくともそう見えただ」

きっとおれとは正反対の人だったのだろと思う。母親似という明とそっくりの頭のいい人。

「だけど、三年前の夏に自殺した」

一応海難事故ということになっていると言葉を濁した。

「明に手紙が遺ってあったって。だから自殺じゃないかと思う」

だからみんな隠すのか。確かに身内に自殺者がいるのは外聞が悪いかも知らない。だけど、それは前もって話してくれるべきことじゃないのか？

「遺体があがった時も、葬式の時も明は表面的には全く取り乱さなかった。ブラコンのくせに。そのころから部屋にびんを並べるようになったんだ」

並べてあるのを見たことがあるかと確認された。あると頷いた。

新藤は今もあるのかと呟いた。

「泣きもしなけりや、落ち込みもしなかった。見た目はいたって普通。その代わりお伽話みたいな考えに取り憑かれてた」

曰く、海で死んだ人間は人魚に生まれかわって海の底の国で暮らす、と。

「そこには迎えがないと行けないらしい。矛盾してるよな」

海で死んだら生まれかわれるはずなのに、迎えがないとそこに行けない。明らかな矛盾。

「いつかお兄ちゃんが迎えに来る。だから悲しくないってさ」

死ぬと迎えが来るのか、迎えが来るから死ぬのか。どっちだ？

「死んだ人間が生きている人間を殺せるはずないんだ。だから迎えってというのが何なのか、わからない。だから何がきっかけになって明が、…朋さんみたいになるのかわからない。疑わしいものは全部、

近づけたくない」

言葉を選ぶように新藤はそこまで言って黙った。おれを睨むように凝視した。

遅まきながら、初めて会った時におれを追い払おうとした理由がわかった。本当にいるのなら俺以外で追い払われた奴も含めて全員、ストーカーの疑いじゃなくて迎えかもしれないという疑いをかけられたのだ。

「迎えは、明の兄貴の所に来たのか？」

新藤が黙ったままでいるから、話は一段落したと判断して聞いてみた。

「来た。香月さんと一緒に行っちゃったって明が言った」

香月？ 聞いたことのあるような名前。どこかはわからないけれど。

「そいつは明のことも一緒に連れて行こうとしたらしい。朋さんがそれを止めた」

実際は明を突き飛ばしたそうだ。明が転んでいるうちに、兄貴がそいつと行ってしまった。

「明が窓辺に並べてるびんの中身が何か、知ってるか？」

深呼吸をしてから新藤が切り出した。話が急に過去から現在へ飛躍した。一瞬ついていけなくて答えに詰まる。

「あれは、骨なんだ」

突飛すぎる話。そんなことがあるはずない。

「あれは割れた貝だ」

「俺もそう思う。だけど、明はあれを骨だって言っただ」

「じゃあ誰の？」

「…たぶん朋さんと母親の」

思い出した。香月は明の母親の名前だった。

「朋さんは手紙と一緒に青いびんを二本明に託した。中身が入ったのとカラのと。朋さんがいなくなつて、明はカラのびんに中身を拾ってきた。俺は昨日、明にカラのびんを渡された。考えすぎだと思

うか？」

わからない。

「明の母親は死んでるのか？ おれは離婚したって聞いている」

「父親が一方的に離婚した。三年以上生死不明の場合は離婚の理由になる」

生死不明。明の母親が今どうしているのか誰も知らないということ。生きているのか死んでいるのかも。

「新藤、おまえ、詳しいな」

他人の家の事情をこんな知っていて、法律を調べた痕跡もある。異常なほどの執着をかい見た気がした。そう、異常だ。

「…俺は、悔しいんだ。あいつは…」

おれをずっと真正面から見ていた視線を外して苦笑した。

「三年前からずっと、待つてる。あいつにはそれ以外どうでもいいんだ」

どこから出したのか、タバコの箱を持っていた。そこまでの動きは無意識だったらしく、溜息をついてまたしまった。おれはその一連の動きを、見なかった振りをした。妙に親近感を覚えた。

無言のまま二人して飲み物に手を伸ばした。

突然テーブルの上で携帯が鳴りだす。マナーモードにしてある携帯は、硬いテーブルの上でガーガーうるさい。うるさいと思いながら、見詰めてしまった。

「でなくていいのかよ」

新藤に言われてやっと、自分が電話にでるかむこうが諦めないと音が止まらないことに思い至った。我ながらどうかしている。表示は家からだ。

台風

「もしもし？」

「お母さんよ。台風の速度上がったって天気予報でも言ってるし、外すごいわよ。電車が止まらない内に帰ってきなさいね」

「三人とも家にいるの？」

「それが、いつの間にか明君がいないの。携帯電話の電源切ってるみたいだし。行きそうな所知らない？」

心臓が大きく鳴った。

「心当たり、のぞいてから帰るよ」

必死で平静を装って返事をした。母は気をつけて帰ってきなさいねと言って電話を切った。携帯を持ったまま呆然としているおれに、新藤が怪訝な顔をした。

「どうかしたのか？」

「…明が家からいなくなった」

二人して固まった。見つめ合ってしまった。我に返ったのは新藤の方が早かった。

「早く行け。どこに行けばいいかはわかるな？」

おれは言っていることが理解できなかった。言葉が音のまま素通りしていつてしまう。

「早く！ 俺じゃダメなんだ」

急かされていることだけわかって、ぎこちない動きで椅子を鳴らして立ち上がった。その時、不意に何かが手に当たった。カッンと音を立てて床に落ちた。慌てて拾うと、それは青いびんだった。

海に行けばいい。天啓みたいに結論だけわかった。

拾ったびんをポケットにねじ込み、駅へ走る。新藤も飲みかけのジュースもテーブルに置き去り。たぶん、勝手にどうにかなるだろう。ちょうどホームに来た電車に飛び乗った。

海難事故で死んだ兄。迎えに来た母。海底の国への案内。海で死

んだ人だけが生まれかわる国。白い貝の破片。原型を留めないほど割れた貝。二人分の骨。骨を入れるための、青いびん。びんを振って見せた明。硬い、痛そうな音。

「声が、よく聞こえるように」

意味深な言葉がよみがえる。

思考がまとまらずに、断片のまま積もっていく。耳の奥で、自分の鼓動がうるさいくらい鳴り続けている。

ポケットから、びんを取り出した。妹が触ろうとして怒られたびんには、それだけの意味があった。おれが思いもしなかった意味が。鮮やかな青をじっと見る。さつき落としたせいか、ひびが入っていた。

電車が着いた。時間が酷くゆっくりと動いていた。二駅がこんなに長いと思ったことはなかった。車内は混んでいて、雨の日特有の湿ったにおいがした。みんな窓の外を、不安そうな顔で見ている。電車の中だけが明るい。雨に打たれた窓は、歪んだ景色を映していた。それでも、駅には着いた。そこでやっと、傘を店に忘れてきたことに気付いた。

台風だ。どうせ傘をさしてなんかいられない。ちやちなビニール傘なんかどうせ壊れる。持っているだけでムダだ。おれは雨の中に駆けだした。

目が開けづらい。生ぬるい大粒の雨が、顔も体も道路も何も区別せずに濡らしていく。おれは走ろうとしているのに、風と雨のせいではなかなか前に進めない。時間や距離を測る感覚が麻痺して、気持ちだけが焦る。空気の壁が立ち塞がる。後ろに押し戻されると思ったとたんに背中を押される。

道路の向こうに海が見えた。灰色と群青の無彩色の風景。世界の終末を連想させるような光景。波打ち際に立った日が嘘みたいだ。青い空も入道雲も、楽しい家族連れも全てが嘘。ぬらぬらと蠢き、襲いかかるようにくり返す波は生きているように見える。大きな、恐ろしい生き物。

風に取り囲まれた。渦を巻く風の中に立ち尽くす。どちらから吹いているかも、もうわからない。いつもは気にもしない透明な空気に、質量があることを実感する。大きさはつまり、力だ。

道路から白いガードレールに手について砂浜を見下ろす。必死の思いであたりを見回す。明にそこにて欲しいのか、いないで欲しいのか、自分でもわからない。全部、単なる考え過ぎだったと言いたい。

暗い色の砂の上に、明を見つけた。

「明！ アキ！」

風と波音のせいで聞こえない。聞こえるはずがないとわかっているのに叫んだ。壊れたみたいに同じ名前を呼んだ。もちろん明が振り返るはずがない。それでも叫ばずにいられない。雨が口の中に入ってしまった。

苦しい。風が強すぎて、思うように息が吸えない。それでもどうにか両腕で顔を庇って息を整える。

見下ろすと、ふらふらと明が歩いている。目的が彼の兄と同じなら、そこに立っているだけということはあり得ないことだった。見ている場合じゃない。

「アキ！」

もう一度、無意味に叫んだ。聞こえてきた自分の声には、まだ力が残っていた。そのことに励まされて、おれはまた走り出した。海岸に降りる階段を見つけて、砂の上に降りた。部活を辞めたせいで体力の落ちている自分の体を呪った。アスファルトに比べると、砂浜は格段に走りにくい。

おにいちゃん

「アキツ！」

やっと追いつくことが出来た。腕を掴んで名前を呼ぼうとした。掠れて、荒い呼吸に紛れて、ハッキリ発音できなかった。

腕を掴んだと思った手は、即座に振りほどかれた。振り向いた明には表情がなかった。おれを見ているはずなのに、どこを見ているのかわからなかった。

「こんなところでなにをしてるの？」

抑揚のない声。おれが返事をする前に、明は右肩の方を見て、それもそうだねと頷いた。微笑んだようにも見えた。

「！ おまえ、誰としゃべってんだよ！」

言いながらも、検討はついていた。迎えた。明の兄貴の所にも来た。三年前、母親が兄弟を連れて行こうとした。

迎えが見えないということに、疑問を持っていない自分に気が付いた。新藤の話を聞いている最中は、当然見えるものだと思っていた。というよりむしろ、見えるかどうかを考えながら聞いていなかった。

死んだ人間が生きている人間を殺せるはずない。だから迎えが何なのかわからない。新藤はそう言った。おれもそう思った。生きている人間を作為的に殺せるのは、生きている人間だけだ。だから明を死なせるのは迎えじゃない。明自身だ。

三年前の迎えが母親の名前なのは、母親が死の象徴だったからだ。行方不明、生死不明と言いながら、誰も彼女が生きていると思っていない。思っていないのに、誰も死んだと口にしない。生きていないが、死んでいない。二律背反が、明に何も影響しなかったとは思えない。

そして今の明にとって、死の象徴は一人しかいない。
「もちろんおにいちゃんだよ？」

明は急に笑顔になった。本当にうれしそうな顔をしておれを見た。
「おにいちゃんが、やっとむかえにきてくれたんだ」

また右側を向いた。少し照れたような顔をしていた。それからおれに背を向けて、海へ歩き出した。腕を取ろうとしたが、雨で濡れて掴みづらい。触ることが出来ても力いっぱい振り払われる。そのくり返し。

そうしているうちに、明が海に入った。まだ足首までしか深さはない。

「そこには誰もいない。朋さんはいない！ いるはずない！」
風に負けないように、肺の中の空気を出し切るように叫んだ。朋さんという名前に、明が驚いたようにおれに向き直る。

目をみはる明の、その向こうをおれは見ていた。固まる前のコンクリート色をした海に、波が起こる。小さかったそれが、徐々に大きくなり速度を増し近づいてくる。

あれが来たら持つていかれる。人間なんてひとたまりもない。速いはずの動きは、スローモーション映像みたいに見えた。そしておれもスローモーションでしか動けなくなった。

体ごとぶつかっていった。不意打ちで、どうなっているかよくわかっていない明を下敷きにした。ほんの数センチの深さしかないとはいえ、海水の中に押し倒した。むせる明をそのまま抵抗できないように、砂の上を引きずった。出来る限りの速さで海から離れようとした。

立ち上がった波は予想以上に大きい。

必死になって明を引きずっていった。それでも砂の上に足を投げ出した明の膝のあたりまでを濡らした。海の中に引き込まれそうになった。けれどそれだけで済んだとも言える。倒れた拍子にポケットの中の硬い感触を思い出したが、今は逃げよう。

茫洋とした視線を漂わせる明を立たせて海岸を歩く。おれは早くこの場を離れたいのに、明が急いでくれない。手を引くおれに引きずられるように、斜め後ろを歩くだけ。その足がびたりと止まった。

道路に上がる階段の前だった。握っていた手が振り払われた。

「…んで、なんで？　せつかく、おにいちゃんがきたのに」

聞き取れるギリギリの声だった。平板な声。何に対しての問いかわからない。

「おれにわかるように言えよ！　おまえが何考えてるか、おれにわかるはずないんだから」

ポケットの中から、青いびんを取り出す。

「だいたい何なんだよ、このびんは」

「！　それは…」

びんを凝視する明の目の前で、地面にそれを叩きつけた。ひびのせいか、それは簡単に割れた。びんはただの青いガラスになった。明は声もなかった。

「おまえの兄貴が、お前に死んで欲しがってるって、本気でそう思うのか？」

答えはない。風が吹き荒れる。

「三年前に、おまえを止めたのは、兄貴じゃないのか？」

波がうるさい。新藤から聞いただけの過去を、偉そうに突きつけた。知ったかぶりだと自覚があった。そして、かなり勇気の必要な言葉を続ける。

「おれと朋さんは違う。だけど、おれだってお前の兄貴だ。おれもおまえに、生きていて欲しい」

しばらくの間、明は俯いたままだった。

「ツフ、フフ、そうか、そうだよね、フフフ」

一瞬、狂ったかと思った。明は片手で顔を覆って笑った。風の中で息が続かなくなるまで笑い続けた。それが収まると、くぐもった苦しげな声が出た。息を止めて何かを堪えているようだった。

顔を隠す手を掴んで、明を引き寄せる。顔を押しさえる手を退ける。頭に手を掛けて、おれの肩に明の顔を伏せさせる。

「泣けよ。誰にもおまえの顔は見えない」

そのまま階段を背にして、ずるずると座り込んだ。風が少し遮ら

れた。ここまで波が来ることはないだろう。明の頭に置いたままの手で茶色い髪をかき回す。肩の上に重みを感じた。雨に濡れ続けている体には、その重みが温もりのように思えた。

さっきまでいた海と砂の境界を見詰める。張りつめていたものが、ゆっくりと解けていった。

「…兄さん、ぼく達このかつこうで電車、乗れるかなあ？」

どれくらいの間座り込んでいたのかわからない。照れ隠しのつもりなのか、明がそんなことを言って顔を上げた。雨に打たれて、涙の跡はすぐわからなくなった。

自分の顔が熱くなるのを感じた。赤い顔を見られたくなくて、おれも上を向いて雨に打たれた。大粒の雨が気持ちよかった。

おれ達はずぶ濡れで、砂まみれで立ち上がった。電車に乗れるかどうかは微妙なところかと思った。

「お祖父ちゃんの家行かない？ 近くなんだ。たぶん着替えがあると思う」

明の提案でお祖父さんの家に行くことになった。おれが前に行ったことがあるとばれないように祈る。階段を上っていく時の気分は、下りていった時とは雲泥の差だった。天気は同じ雨と風なのに。

おにいちゃん（後書き）

次が最終話になります。

台風の日には海岸に行ってはいけません。自殺行為ってもんです。

海辺のおとぎ話（前書き）

割とほのぼのなエピソードです。

海辺のおとぎ話

「もしもし、智美？」

電話に出たとたん何をやっているのかと詰問する声がうるさい。後ろで母親が大声を出している。

「今、明と一緒に明のお祖父さんの家にいる」

「！ 何でそんなとこにいるのよ！」

断りづらかったから。どきどきしながら辿りついた明の祖父宅。

お祖父さんは、おれに初めて会う人のように振る舞ってくれた。それよりも驚いたのが、ずぶ濡れの明を見た時のお祖父さんの反応だ。ここまでの明の行動を全部察したような顔で、涙目になった。決まり悪そうに明は目を逸らした。自分も濡れるのも構わずに、お祖父さんは明を抱きしめた。明はされるままになって、目を閉じた。

「ありがとう」

感動の再会を見るみたいだと思っていた部外者のおれに、お祖父さんが言った。大きな声ではなかったけれど、心からの言葉だとわかった。おれをまつすぐに見る視線からも、それは伝わってきた。

着替え終わったおれ達は、泊まっていくようにと強く勧められた。台風が最も接近するのは夜中だ。電話で母は早まったと言っていたが、どちらにしても今から勢力が弱まることはなさそうだ。雨戸も全部閉めた家の中にいるのに、外の激しい雨音が聞こえてくる。それに、今にも泣きそうな顔で明を抱きしめるお祖父さんを見てしまった。ここで明を連れて帰ることが、まるで悪いことのように思えてしまった。

それで、お祖父さんの言葉に甘えることにした。その上電話まで借りて、家に連絡を取っている。携帯も忘れてきたことに、着替えた時に気付いたのだ。傘と一緒にテーブルに忘れたのだろう。きつと新藤が持っていてくれる、たぶん。

騒ぐ妹に泊まることを告げて、無理矢理電話を切った。どっと疲

れた。

その日の夜、客間にふとんを並べて眠った。豆電球だけをつけた部屋で、ふとんに寝ころんだまま二人で話した。

「三年前のこと、どこまで知ってるの？」

新藤のこともあるし、どう言ったらいいか悩んだ。隠してもどうせばれるという結論に達して、正直に話すことにした。

「香月って人がおまえと朋さんを迎えに来て、朋さんがおまえを残して行ったってところまで」

考えるような間が空いた。首を巡らせても、輪郭しか見えない。何を思っているのか、表情は見えなかった。

「今日、兄さんにはお兄ちゃんが、矢島朋が見えた？」

「見えなかった」

即答した。明は天井を向いたまま息を吐いて、良かったと呟いた。

「良かったって、何が？」

「もういないって、わかってても会いたい人って、いない？」

黙るしかなかった。否定できなかったから。頭の中を父の顔が過ぎった。

「会えるってわかったら、その結果がどうなるんだとしても、会いたくなる。そういうものじゃない？」

同意を求めるように言葉が切られる。おれはそうだなと頷いた。

「三年前、お父さんはお兄ちゃんを諦めた。追いかけられたのに、追えないように僕を捕まえて、自分はただ泣いてた。その時に、あの人は僕のことと諦めた。いつか僕がいなくなるってことを、あの人は受け入れたんだ」

よそよそしい親子だと思っていた。お互いに関わり合わないようになっている理由が、少しわかった。

「おまえまでいなくなるのを怖がってたんじゃないのか？」

「それは知ってた。けど、だけど僕は、お兄ちゃんに会いたかった」

怖がる父親に、明は怒っていたのだ。もう取り返しがつかないと

知っているのに。そうしていないと、バランスがとれなかったのかもしれない。おれが父親を轢いた運転手を憎んだのと同じように。結果として明も三年前、朋さんを追わなかったから。何も出来なかったから。

「それで、朋さんには会えたのか？」

仰向けに寝ていた明は、寝返りを打って向こうを向いてしまった。ずっと黙っているから、答える気がないのだろうと思った。

雨の音が聞こえる。強弱をつけて降り続ける。風で空き缶か何かが飛ばされてカランカランという音も聞こえる。耳を澄ますうちに眠たくなってきた。今日はいろいろありすぎた。

「わからない。会えたと思ってた。けど…今は、もういいって思えた。…兄さんは何で僕を…」

明の声も聞こえた。何を言っているかはよくわからない。けれど、悲しい声じゃなかったから、まあいいかと思った。

夢を見る。

金色の鱗の人魚。人魚というと女の人のイメージがあったのに、なぜか男。どうせなら女の方がよかった。

何も言っていないのに、顔に出たらしい。その人魚は笑った。そもそも海の中で何か言えるはずがない。空気がないから。

空気がないのに苦しくないことに驚いた。海の中で呼吸している。それで夢だとわかった。

人魚の口から球になって上っていく泡を目で追う。日の光に揺らめいて、輝いて見えた。

急に手首を掴まれた。楽しそうな顔でおれの手に何かを握らせた。そのまま手が開けなくなった。

慌てるおれに手を振って、金色の人魚が泳ぎ去る。その向こうに仄白い燐光を放つ町が見えて、そしてかき消えた。

目を開けると真正面に顔があった。どことなく夢に出てきた人魚に似た顔。そこまで考えて慌てた。なんで自分は明に、こんなに接近しているんだ？

離れようとしたら、右手を抱き込むように明に掴まれていた。無理に手を抜いたら明が起きてしまう。どうしよう？　とりあえず、どうして手が開かなくなる夢を見たかはわかったけれど。

帰り際にお祖父さんに、またいつでもおいでと言われた。外に出ると、昨日とはうってかわった上天気。日中は暑くなることが予想される。朝の内に帰ることにして良かった。

「お兄ちゃん達、朝帰り」

家に着くと、開口一番妹が言った。ちょっとあんまりだと思った。声に気付いた母親も玄関に来る。

「早く帰ってきなさいって言ったのに、翌日帰ってくるってどういうことよ？」

二人で怒られた。

「いきなりいなくなったら心配するじゃない」

明に向かってそう言った母親は、かなり本気で怒っている。それなのに、明はどことなくうれしそう。反省したような顔を取り繕っていても、わかってしまった。何がうれしいのかはサッパリ理解できないけれど。

小言を一通り聞き終わったあたりで明の携帯が鳴った。すばらしいタイミングだ。同じことをくり返そうとしていた母親は、出端をくじかれた。おれ達はやっと小言から解放された。

明が変な顔でおれをチラッと見て、それから電話に出た。

「はい？　…何だ新藤か。…うん、大丈夫。…えっ、海？　帰ってきたばっかだよ？　…わかったよ、行けばいいんだろ…うん、じゃあ」

電話を切った明は溜息をついて言った。

「兄さん携帯なくした？」

携帯のことをすっかり忘れていた。聞いていた妹と母親は、何だ

か驚いた顔をして目配せしている。

「新藤が持つてるから来いって。待ち合わせ、海岸。また電車乗らなきゃいけないよ」

めんどくさいとぶつぶつ言っていたが、新藤とおれが知り合いなのかとかそういうことは言わなかった。そのままちよつと待っててと言つて二階に上がつていった。

「兄さん？」

明に聞かれないで済んだと思つてホツとしたのもつかの間、妹が興味津々な顔でおれを見上げている。どう言つたものだから判断できなかったから、ああとだけ言つて頷いた。妹は不満そうな顔をした。母親は目を細めて笑つた。

明と二人でやつて来た海は、太陽光を反射してきらきら光っている。青い空、白っぽい砂。

「新藤はまだみたいだな」

そうだねと言いなながら明はどんどん階段を下りていく。靴も靴下も脱いでしまつて、波打ち際まで歩いていく。おれは昨日座り込んだ階段下のあたりでその様子を眺める。

明がポケットから何か取り出した。光に透けて、青い色が見えた。二階に行つた時に残りのびんを持ってきたようだ。何をするのかと思つて見ていると、蓋を開けて中身を撒き始めた。白い欠片を水の中に振り撒く。儀式めいた行動。その時の明は、なぜか楽しそうな顔をしていた。無理しているように見えた。

おれも靴を脱いで、明に気付かれないように海に入った。

「明！」

不意に呼ばれて振り向いたところに水をかけてやつた。びんを砂浜の方へ置いて、明もムキになってやり返してくる。二人で小さい子どもみたいにふざけ合う。

「仲良さそうだな」

煙草片手に新藤が立っていた。ガキっぽいところを見られて、ばつが悪かった。すぐに水のかけ合いを止めて、新藤の方に歩いてい

った。

「おかげさまで。ところで携帯持っていてくれたって？」

新藤が持参の携帯灰皿で煙草を消す。

「心配したんだからな。連絡ぐらくれるかと思たら、どっかの力は携帯自体忘れていくし。…何も出来ない立場っていうの、わかるか？」

返す言葉もない。頂垂れるおれに、黙って携帯を差し出してくれた。

「ありがとう」

礼を言っ受取った。反応がない。新藤は海の方を、明のことを見ていた。

明はカラになったびんを、沖に向かって投げた。青いびんは海の中に沈んでいった。それから明が、こっちに向かって手を振った。苦笑した新藤と、二人で明の方へ歩いていく。

こういうのも、いいかもしれない。

海辺のおとぎ話（後書き）

ここまでお付き合い頂きありがとうございました。

私は台風は夏の終わりにきて台風が過ぎたら秋が来るというイメージがあるのですが、今は真夏に直撃することが多いので読んでいて違和感があつたかもしれません。でも、今が異常気象だと思うので直す気はありません。

最後まで明とお父さんの和解はありませんが、少し大人になった明はスーパーマンではない、無力な自分と同じ父という存在を認めるのだらうと思います。

この話で最も書きたかった兄弟の絆（ちょっといき過ぎ？）が上手く伝わっていたらいいなあと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8741b/>

白い貝の声

2010年10月8日15時54分発行